

夏目漱石と養老孟司

Junko Higasa

養老孟司氏著『「自分」の壁』を読み始めてすぐに、夏目漱石の小説の内容に思い当たった。もっともこの本の第8章に以下のように明確に述べられている。

『明治以降、入ってきた西洋近代化的自我という考え方は、伝統的な日本の考え方とは相容れませんか、間違いなく日本の世間では摩擦を起こします。そのことをよく理解していたのが、夏目漱石です』

すなわち、養老孟司氏が感じていることと夏目漱石の感じていたことには共通点があり、それは自然と生物という観点から普遍的な自己と他者の関係を物語る。そう思った時、漱石が『吾輩は猫である』で、ダーウィンの進化論を持ち出したことを改めて思い出した。漱石というと、つい弟子の寺田寅彦との物理学的問答を思い浮かべてしまい、生物学という観点を忘れていたが、この本を読むと漱石の偉大さが増してくる。漱石文学の価値は文学だけにとどまらず、美術工芸分野はおろか、科学という生命の根源追及にまで至っていることに改めて気付かされた。

さて、本書の「日本人は世間で自分を出さずに従っている分、頭の中の自由度は相当なもの。外で不自由な分、中で自由になっている」という背景には、東西の宗教の違いがあるが、ここで『三四郎』の広田先生の言葉を思い出す。『熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より.....』『日本より頭の中の方が広いでしょう』『囚われちゃ駄目だ。いくら日本の為を思ったって最頂の引倒しになるばかりだ』日本人には宗教の枠がないので何を考えても自由だという。そして人の意識は自己の範囲を決めていて、その範囲内のもはえこひいきするけれど、それがいったん外へ出てしまえばマイナスに転じるという。だから誇大思想に陥ってはいけなのだろう。

そして「細胞の中には別の変なものが入っている」という遺伝子の話。リン・マーギュリス説『自前の遺伝子を持つものは、全部、外部からやってきて人体に住みついた生物である』ここでは『虞美人草』の小野さんを思い出した。宗近君の来訪に対する小野さんに「一点好意の核」があり、その上に「気の毒の輪」「気が咎める輪」が重なり「困る輪」が黒墨を流したように未来につながっているのは、もともと好意の核を持った小野さんの欲の進化に伴い住みついた遺伝子ではないだろうか。

それから「GDPと自殺率は比例する」という話。これは『吾輩は猫である』で「将来自殺が増える」と話題になるが、社会経済格差が広がる事を予測したことになるだろう。全員貧乏よりも、周囲に金持がいて貧乏とを感じる方が、自殺率は高いそう。

それから、かつての日本では変わらないものが「世間」と「大和魂」で、「大和魂があるから、外国から何か入って来ても簡単には変わらない」のが常識だったそうだが、これを読んで『猫』を思い出した。漱石は『三角なものが大和魂か、四角なものが大和魂か。大和魂は名前の示す如く魂である。魂であるから常にふらふらしている』と書く。養老氏は「たいいていの人にはフラフラ生きている」という。

形こそ違え、養老氏と漱石は共に「世間に馴染めない自分」という立脚地から出発した。そして世間から逃げずに自分を作る中で、自己と他者を捉え、その先にある自然界における人間共生の意義を社会に向けて発信している。 (2014.7.8)